







傳聞岷山如羊祜、蓋居此  
 人淚を隨て其庫の正成也  
 碑は只々その脇に新川  
 と号する處に只其徳の敬重す  
 依りて遷すに語を一白



一幸如奉如了所及八  
方道懷眾人所共

差如幸如所了  
一

新乃誌

亥陽八年亥以秋





信 守 長

御 正



此の如く云ふ所の如く五月の間の事  
もいふ所もあつたが候に  
かゝるに候へども  
松し屋の事と申すは  
違はぬ事と申す候へども  
紙の事と申す候へども  
由しは候へども

いふ所候へども  
申す所の事と申す候へども  
二百里程の事と申す候へども  
十一月の事と申す候へども  
いふ所の事と申す候へども  
彼下地候へども  
一音に候へども  
いふ所の事と申す候へども  
又いふ所の事と申す候へども





ことわざ集の巻のしるしに其の良家たる  
 見よ新しき自にふ降くものり今言  
 しの申つてはありやともしよふにれ  
 酒にちかき酒とさるるやと多しこの  
 今の急先と昔の酒とさるるに  
 たくはゆるる酒道よものつとや  
 あり多くも世にまきとさるる教と後  
 忠實にたすまきと迷はれそ九ね  
 ちよのしや巻の百六加のしるしに

見物き佛祖の所膳あり天比萬縁  
 と見物なりまかかるとそま周ゆたる  
 賢ふく伽藍は破教の徳笑酒の徳方の  
 読笑いつれとまきとさるる酒とまきと  
 け道なりつれとまきとさるる酒とまきと  
 本段のねれみまきとさるる酒とまきと  
 のまきとさるる酒とまきとさるる酒と  
 れはまきとさるる酒とまきとさるる酒と



金中争の難士大ニ聖クニ君塔成  
 築さ之ニ水漂泊如穂波杖とく地  
 宥頤を授くとも風物と思澤  
 を辨出すこととて旅字に染と名付  
 筆視を遣いしりしもの思ふる  
 〴〵古前如牌子の一章  
 ち捧  
 物いぬ教く  
 既小松  
 既小松  
 既小松

花のふらふら

さらさらさらさら

花のふらふら  
 九種



しんがけ 塚 澤 之 谷 塚 上 ち 年 終 小  
湖 水 五

親 方 一 七 八 九 年 紀 物 也 小 六 月 全

しんがけ 塚 澤 之 谷 塚 上 ち 年 終 小

孝 女 之 日 何 如 也 又 ち 年 終 小 湖 水 五

しんがけ 塚 澤 之 谷 塚 上 ち 年 終 小

しんがけ 塚 澤 之 谷 塚 上 ち 年 終 小

湖 水 五



宝無名の一と一なりとの未だ  
象深一足のおくまのまじき  
境のうま味をぬきしは種々の  
小山とたのみ解およ、おのぼり  
らじりりしは、梵とら、軽とら  
このこゝろ、眼みちりたり

物部一と一と一と

新塚

新塚

一と一と一と一と

仁府社底の字

古也くふふ種と馬の字 新士吐

田子のゆのゆ

一と一と一と一と 東の字

なろーの種さくや池の中 新塚





之... 塚を  
 抱... 石のあり... 碑を  
 母二見形... 塚を  
 此... 日若  
 亦... 塚

...  
 ...  
 ...

寛政十石卯月也

...

...



...  
 ...  
 ...



おのれはとてはらさぬ

思ふはつらむとてはらさぬ

信のね

何れはとてはらさぬ

城のる

らめはらぬ

いほの

いほの

おの

いほの

いほの

いほの

いほの





言ふも〜大なる〜正し〜  
極む故却の記すも其に〜  
作す〜海博の道〜  
室多〜花意の主人〜  
世天〜の〜陰上〜有縁の〜  
際〜の〜  
あ〜枝と〜

おのり〜

夢中



散

〜

山ろと名何楽

移階

辰

中跡も

浪弄

〜





の序のゆき  
ゆきこく

再臨と如し

秋葉のえき

新編

白羽  
紀

流るるものなり

ふるさと

れいつの流るるものなり

流る

他  
虫科



る家とぬ

お中納

巻六

お子清く

あまの

寶曆土

大なるの石牌

お中納

左玄

蕉吟也

水室



翁海之有

之白子

洛陽 湖海

如日之出

香如海

古池之科

或水脚

之有

信作

言其美也

陸心之

乙二

乙二



市上湯中作尾府

少系塚也之黒人

跡跡

高塚高塚

尾府

跡跡

高塚也之高塚

高塚高塚

高塚高塚

高塚

高塚高塚

高塚也之

高塚也之

高塚



社名の探を

心

その瓦造く、ほらなる塚

秋  
——  
山をぬき

くや塚

心

舟中飽満り人多くし  
風物も大異なり  
くわ後、さうも、後の  
いふ舟中果し、いふ所  
世若し、即ち、舟中、  
寂——  
——  
わらわの

水島

未夏  
六月十二日





蓬風の吹鳴るよの正風成  
 ちりは左地を蛙の音はゆきの  
 うのまを蛙の音はゆきの  
 他青の吹鳴るよの正風成  
 有信の吹鳴るよの正風成  
 二章 吹鳴るよの正風成  
 し 雨の驚く蛙の音はゆきの  
 六の正風成 吹鳴るよの正風成

新くは塚中より神を  
 拜ししよりの甘味のは  
 多しと争ひを止む  
 都鄙の俗儀は昔の  
 化度かきと再抄

時明和改元秋八月廿三日

三つあひ  
 山崎の隠士  
 茅風菴石居



言葉書 圓の雁宮の魚のぬれどし

一声毛

多のりよあ

唱

中起  
か  
那

江都

弁天

お

時明知政元秋八月奥羽行旅の  
朽可ふ速とと吉池の塚とあましハ  
秋季子西人吉、話をよせす 作りか

たけしるる場と使

はかり  
ニらん

まゆま

場とるどとれ

はき  
る



言葉書回切雁宮の魚くのぬたし

一声毛

多のくさあ 喝

中 ち 那

江都

弁天

時明如改元秋八月奥羽行布

秋天子子西人吉く諸を二

おのり

言をたふれ信宿とく

御丑良

言はたふも清地と

字二

陸ふんくすも他れ秋そら

五



神も人の弱いに威と増ふや  
はまの公御塚ハ其妻とと人の建と  
ちりてそく以終のそくを  
かしくふもやそ月と中れい。極  
る。中。人。い。ふ。あ。泉。と。し  
得ふとあし

高きおに多坊竹や翁塚

お新太  
音天

高きおに多坊竹や翁塚

翁塚

高きおに多坊竹や翁塚

音泉



予を祀るに石碑  
志願のありて具  
神の御心を  
成るに子孫  
取陀に  
ありし志願の  
と決むれば

祀るに石碑  
ありし志願の  
と決むれば

予を祀るに石碑

石碑

予を祀るに石碑

石碑



海家

甘女

甘女

甘女

海家

甘女

甘女

甘女

甘女

甘女

仙卷

甘女

甘女

甘女



故翁の石解と申す

多々塚の前ヤ

湯の湯

湯の湯

石の湯

二二

九好

字のまゝに書かざる池青の字

風雅の一字の信ありて言

塚を供養志すは地味なり

法一筆試奉持半誠小

行杯のお念にきれり

哉

度支

洋

おのれが顔

月や翁塚

御塚の傍に  
代りて前か  
一りとも  
二十有  
山  
湯  
湯

湯

湯

湯



愛知養花屋の徳書  
あゝ〜 古縁の石碑と  
流しと

疎き〜 夢と

ふきの穂野

神谷新浮

茶々

池きふり遠き行  
古縁の石碑と  
疎き〜 夢と  
ふきの穂野

流き流し

あゝ〜 古縁の石碑と

流の

茶々



仁心之解法一 元徳日

五甲坊  
五甲坊  
五甲坊

行物世為心

心物世為心

心物世為心

心物世為心

心物世為心

心物世為心

心物世為心

行止場

心物世為心



池まきと送るさくら

祖高の松林の中へさくら

油のさくらをいかにさくら

まきと松林をいかに

江戸  
野田

朽まきと松林をいかに

かきと松林をいかに

昭和六年三月

松林一見の折る松林

池まき松林の送るさくら

岸の所松林をいかに

月松林の送るさくら

松林

さくらと松林をいかに

市野村  
野田



交心抄

三才池也福

袁陽信坊

禪丈

九好



三才池也福

三才池也福

三才池也福

三才池也福

三才池也福

三才池也福



な 果 明

なほさしきさのささきささき  
深海のゆきさ青古洞の  
あかりささきささき  
着眼し清しささきささき  
清きを用いし作らば  
物々の清きささきささき  
凡物し真如ささきささき  
九ありしささきささき

るの思ささきささき

なほ  
ささき

池青本ささき成行堂の境内  
ささきのささきささき  
ささきささきのささき  
ありしささきささき  
皇太子ささきのささき  
清の清きささきささき  
あふりささきささき



らん初んれきうくわきん

羊坂海下

听者房

叶急

城北正

らふた乃月

初ら初の城と沖を所

越音

市院

おこ

えつくそききいしんくわ

お月の人



お城お清め

城新音

音城

お城お清め

お城



初んれきうくわきん

羊坂海下

听者房







為屋上流所、因作

と感一

二五ノ作ハ二部一茶の目

石城下

三行



系目の末流に流着候云上

と感一と感一と感一と感一と

新島田上目入

如表

後合ス事家自向ノ

と感一

如表

母







Handwritten cursive text, likely a signature or name.

Handwritten cursive text, possibly a date or a specific reference.

Handwritten cursive text, continuing the script.

Handwritten cursive text, appearing to be a name or title.

Handwritten cursive text, possibly a signature.

Faint vertical text on the left edge of the right page, possibly bleed-through or a marginal note.

Main body of handwritten cursive text on the right page, consisting of several lines.

Handwritten cursive text at the bottom of the right page, possibly a signature or a closing.

Handwritten cursive text on a separate piece of paper or a flap at the bottom right.



よき世にありては  
白き世にありては

くらの目とけりあき

強の口を

秋田  
秋田

客白

客白

客白

秋田

秋田

其の...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

客白

客白



白雲の血路

為極うらひんをさしふ  
けりけりもふれおふふれけり  
ゆきふのひをさしけり  
うらひのけりけりを送りけり

即ちさしをともおふけり  
ゆきけり

ちけりふをけり  
りきけりけりけり  
ゆきけり

ゆきけりけりけり

あき

共二章

書名はあき





今年天明七未終於廢館のうき年  
天皇の御体有由乃玉亭亦さうぬ  
されおの父さまの御幸池邊古く  
山内のお流りあふたふり  
旅客集談りの勢いさ  
お家おあふたふりさうてお家の  
清むもさあめ清むもさうて二代  
なまらう二さまの人さうと捨あす  
さう志さうさうさうさうさう

あふたふりさうさうさうさう

あふたふりさうさうさうさう  
あふたふりさうさうさうさう

あふたふりさうさうさうさう  
あふたふりさうさうさうさう  
あふたふりさうさうさうさう  
あふたふりさうさうさうさう

楚山亭

理心

お

お



月夜の静けさ  
 花の匂い  
 風の音  
 水の流れ  
 鳥の囀り  
 虫の鳴き声  
 遠くからの鐘の音  
 懐かしい  
 月夜

月夜  
 花の匂い  
 風の音  
 水の流れ  
 鳥の囀り  
 虫の鳴き声  
 遠くからの鐘の音  
 懐かしい  
 月夜



世にそゝるまゝ  
あはれはあゝ  
九おしあゝ

心はわくわく徳の風

身は

心はわくわく徳の風  
あはれはあゝ  
九おしあゝ  
心はわくわく徳の風  
あはれはあゝ  
九おしあゝ  
心はわくわく徳の風  
あはれはあゝ  
九おしあゝ



くさくさくさくさくさくさく

あまのいかにくさくさくさくさく

あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに

武列川越井中

り節

あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに



あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに

あまのいかに



あまのいかに



世語をる集の巻終に書と人との往還の折  
別人も其れを有りていふ風文と知りて  
しつゝ又とて痛と著しんま折れと  
あるを折れぬのち角か  
る位と洋と日と文りも  
彼の内人の高海といふ事  
せしむるを折れぬ

平田井岩

文社

福妻に又作ふる案

解の面



おちをほゆる

ゆるいゆるい

ゆるゆるとゆる

ゆるい

すくねの

ねの

法陽法師の







唐武后... 魏... 百... 年

倚... 作

乃... 書... 卷

塚

陣場

...

錦江



白... 月... 心... 記

常... 行... 記

祀... 記

...

塚

...

...

...







Handwritten cursive text at the top of the right page.

Handwritten cursive text in the middle of the right page.

Handwritten cursive text in the middle of the right page.

Handwritten cursive text at the top of the right page.

Handwritten cursive text in the middle of the right page.

Small handwritten characters in the middle of the right page.

Small handwritten characters in the middle of the right page.



Handwritten cursive text at the top of the left page.

Handwritten cursive text in the middle of the left page.

Handwritten cursive text in the middle of the left page.

Handwritten cursive text at the top of the left page.

Handwritten cursive text in the middle of the left page.

Small handwritten characters in the middle of the left page.

Small handwritten characters in the middle of the left page.

Small handwritten characters in the middle of the left page.







なまこ

も、ちんちんも今朝のあつてせうに思ふ...  
作、ちんちんも今朝のあつてせうに思ふ...  
本、のりも今朝のあつてせうに思ふ...  
二月の糧、けいせいのあつてせうに思ふ...  
他、のりも今朝のあつてせうに思ふ...

このりも今朝のあつてせうに思ふ...  
席、のりも今朝のあつてせうに思ふ...  
佐、のりも今朝のあつてせうに思ふ...  
中、のりも今朝のあつてせうに思ふ...

送 倭 氏 へ 書 状  
なまこ

文政七年甲申三月廿一日

蘇 門 印







高松市立美術館蔵

鶴之飛来

越入白の空

小春日山

實心之令





心考相り世を幸らふ事やまじき一  
己の徳とちけりゆく一様の事柄  
多れ翁家、世方その徳い



うづ結ぬ

徳やさし

徳に輝くも

文政十二戊子初

馬

昂才

馬



馬  
馬

馬



馬

馬

馬

馬







天のしづかに  
 雲のしづかに  
 月影のしづかに  
 花のしづかに

夕陽の影

夕陽の影

夕陽の影

夕陽の影

夕陽の影



風  
 花  
 鳥



花  
 鳥

花  
 鳥

花  
 鳥

花  
 鳥





橫之極



地

長

小多能

一英

吳侯公卿

應仙



牛於金年



初讀亦也

素乃為

應





未  
水  
也

如  
情  
色

有  
五  
月  
晴

七十二  
二  
一  
止



着  
保  
を  
様  
一  
々

可  
錯  
宗  
一  
々



香  
通  
中  
々  
折  
以

塚  
通  
子

三  
有  
命  
以  
藻  
河





